

イチゴ炭疽病に対する育苗期の薬剤防除

愛知県農業総合試験場 武山 桂子・石井 直樹・内田 祐太

はじめに

愛知県のイチゴ栽培面積は約 260 ha で、全国第 6 位、収穫量は 10,400 t で全国第 5 位であり、重要な品目となっている（令和 2 年野菜生産出荷統計 2020 年）。一方、本県では、育苗期のイチゴ炭疽病の発生が問題となっており、令和 4 年 7 月下旬の調査で、発生圃場率は 30.8%（県内 26 育苗圃場調査）であった（令和 4 年度病害虫発生予察注意報第 4 号）。本病は、高温になる夏の育苗期に発生しやすく、感染すると、ランナーや葉柄に黒色、紡錘形の浅く陥没した病斑を生じ、葉に小斑点を生じる。発病初期は株の一部の葉が萎れ、症状が進むと枯死する。高温多湿条件で病斑上に大量の分生子を形成し、雨水や灌水によって飛散して二次感染する（石川ら、1989）ため、育苗期の薬剤防除が重要となる。しかし、イチゴの育苗は雨よけ栽培が一般的だが、一部育苗棚を利用した露地栽培もある。また、親株から切り離したあとの子株を露地の育苗棚で管理している場面も散見される。

そこで、愛知県内の育苗期における主要薬剤の防除効果および降雨の影響が少ない薬剤を検討した。また、薬剤耐性リスクの低い殺菌剤を中心とした育苗期の防除体

系も検討した。本稿では、これらの取り組み（武山ら、2021；2022）について紹介する。

I 育苗期の殺菌剤の防除効果

イチゴ炭疽病に登録のある殺菌剤 9 種（表-1）について、育苗期の予防的散布による防除効果を検討した。表-1 に示した殺菌剤の所定濃度の希釈液を、親株から切り離し 5 複葉展開した 9 cm ポット苗（品種‘章姫’）に 1 株当たり約 10 ml（葉の表裏がしっかり濡れる程度）肩掛け式噴霧器で散布し、屋内で風乾した。ただし、ベノミル水和剤は、灌注処理（100 ml/株）した。薬剤散布時には各薬剤ともに展着剤（グラミン S 10,000 倍）を加用した。1 薬剤につき 5 株を供試した。24 時間後に本病菌の分生子懸濁液（ 1×10^6 個/ml）を 1 株当たり 5 ml 噴霧接種した。接種後すぐに葉が濡れた状態でポリ袋に入れ、高湿度条件下の 28℃ の恒温器で 3 日間静置したのち、ポリ袋から出して 25℃ の室内で管理した。灌水は底面給水で行った。接種に用いた分生子懸濁液は、2019 年に愛知県新城市内のイチゴから分離した炭疽病菌（菌株 shin1）（*Glomerella cingulata*）を用いた。本菌株はベノミルおよびアズキシストロピンの耐性菌である。これ

表-1 本試験に用いた殺菌剤

薬剤名	系統	FRAC コード	成分量 (%)	希釈倍率 (倍) ^{a)}
ベノミル水和剤	ベンズイミダゾール系	1	50	500
チオファネートメチル水和剤 + ジエトフェンカルブ水和剤（混合剤）	ベンズイミダゾール系 + N-フェニールカーバメート系	1.10	12.5 + 52.5	1,000
フルジオキソニル水和剤	フェニルピロール系	12	20	1,000
イミノクタジナルベシル酸塩水和剤	グアニジン系	U12	30	1,000
キャプタン水和剤	有機塩素系	M04	80	800
プロピネブ水和剤	有機硫黄	M03	70	600
マンゼブ水和剤	有機硫黄	M03	80	600
ジチアノン水和剤	有機硫黄	M09	42	1,000

^{a)} イチゴ炭疽病に適用されている希釈倍率。
武山ら、2021 より転載。

Chemical Control for Strawberry Anthracnose During The Nursery Period. By Keiko TAKEYAMA, Naoki ISHII and Yuta UCHIDA
(キーワード：イチゴ炭疽病, 薬剤防除, 育苗期)